西岳中学校　学校便り　　令和４年１２月２日号

きずな

学校教育目標「確かな学力と豊かな人間性を備え、力強く生き抜く生徒の育成

都城地区小中高生意見発表大会に〇〇〇〇さんが参加しました。

11月29日(火)に都城市総合文化ホールにて、1年「〇〇〇〇さん」が意見発表を行いました。
自身の経験をもとに学んだり感じたりしたことを緊張しながらも堂々と発表してくれました。

発表内容は、次のとおりです。

題「いのち」

みなさんは正しい「いただきます」の意味を知っていますか？「いただきます」は動物や植物、全ての命に感謝する、その一連の動作のことを言い、僕は普段からそのことを考えて食前の「いただきます」を言っています。今回は、僕が経験した命の尊さについてのお話をしたいと思います。
僕は、去年知り合いの人が運営している「のびのびの森」という自然の中の学校に行っていました。その近くに住んでいる猟師の人が、自分で獲って捌ききらない動物をよく持って来てくれて、僕たちはその小動物を自分たちで捌いて食べていました。その日も、動物を捌くのに誘われて行きました。のびのびの森についてから1時間ほど、山の中で友達と遊んでいると、猟師さんが軽トラックに乗ってやって来ました。「やっと来た！」と思い軽トラックに近付くと、荷台に乗っていたのは一頭のメスの鹿。僕が住んでいる吉之元では、夜に車で走っていると、三頭くらいで道路を歩いているのをよく目にします。そんな鹿が、今は軽トラックの荷台で手と足を縄で縛られていて、僕は「本当にこの鹿を捌くのか！」という興奮した気持ちもありましたが、同時に「捌いていいのだろうか。」という気持ちも高まっていきました。僕の前でただ怯えて震え、今自分がこれから何をされるのか分からない鹿は、あの時どんなことを考えていたのだろうと今でも思います。そして捌く作業がスタートしました。まず専用の装置に鹿の首を通して固定させ、頸動脈を切ります。この時が、鹿が生きている最後の時になります。切ってから動かなくなるまでの1分間くらいは、見ていてなにか不思議な感じがしました。目を見ていて、本当に色が変わったわけではないと思いますが、目から色が抜けてくような、命が失われていっているような、どこかそんな感じがしました。これから捌いて食べる目の前の鹿に、「かわいそう」・「やらなければよかった」と思ったけれど、それはあくまで人間側の意見であ
【裏へ続きます。】

り、鹿の人間への恨みの気持ちは高まるばかりだと思いました。その時はただ、「ありがとう、いただきます」という気持ちでいっぱいでした。そして鹿の目は黒く輝きをなくし、吊るして皮をはいでいきました。首の柔らかい肉や、その他いろいろな肉をはがして、内臓を取り出しました。僕はこの時初めてナイフで切って捌くのをさせてもらいました。僕が切ったのは少しの肉と、心臓です。心臓はまだ温かく、手で持つとテニスボールより少し大きいくらいのサイズで、「2時間ほど前は生きていたんだ。」とその時は考えました。最後に頭を落として全ての工程を終えました。僕たちは、「捌きたてだから食べていいよ。」と言われたので新鮮な状態で食べました。ごま油と醤油、塩などで食べたのですが、それまでに捌いたことのあった鶏とはまた違った味をしていてとてもおいしかったです。

僕は今回、鹿が生きている状態から肉になるまでを見て、食材へのありがたみを再実感しました。これは他の食材に関しても言えることだと思います。今、問題になっているフードロス。僕は鹿を捌く以前も食べ物を残す方ではありませんでしたが、今ではそれまで以上に食材を無駄にしないよう心掛けています。食材に対して、さらには世界中の食べたくても食べられない人たちに対して、自分たちがどれだけ恵まれていて、平凡な暮らしを送れていることがどれだけありがたいことなのかがよく分かったからです。そういうことが実感できれば、今問題になっているフードロスの問題も自然に減っていくはずです。

鹿を捌いているときに感じた「ありがとう」、食べ終えたときに感じた「ありがとう」。命に対して抱いた2つのありがとうを込めて言う「いただきます」。それが「いただきます」の本当の意味だと僕は思います。